

「探究」と「主体的活動」で培われた学校文化を教科の授業に

堀川高校

京都・市立

取材・文／永井ミカ

高校生を自立に 向かわせる学校文化

京都市立堀川高校が探究科を設置したのは1999年のこと。当時から謳い続けてきた「自立する18歳」というコンセプトや、探究活動の理念は今も変わらない。一方で、3期連続のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定に加え、新たにスーパーグローバルハイスクール（SGH）指定と、「国際バカロレア（IB）の趣旨を踏まえ、た教育の推進に関する調査研究」指定を受けるなど、時代や社会の状況に合わせてしなやかに新たな挑戦を続けている。

同校の教育活動の核ともいえる「探究基礎」は、新しい知識を得る方法を1年半かけて学ぶ授業。最初の1年で、論文作成の方法や疑問に対して答えを出そうとする方法をゼミ方式で学ぶ。残りの半年で自ら課題を決め実際に探究活動を行い、中間

発表や論文作成にまでもっていく。

この「探究基礎」では生徒による探究基礎委員会というものが組織され、全員がスムーズに探究活動を進められるよう話し合い、さまざまなアイデアを提案し実行する。堀川高校の場合、1年生の宿泊研修に始まり、海外研修、学校説明会、卒業生に学ぶ会など、校内のほとんどの取り組みにこうした組織があり、生徒が主体的に活動。運営方法は先輩から後輩に受け継がれ、教員が枠にはめて生徒を動かすということは極力しない。7月と11月に行われる学校説明会の場合、7月は2年生の有志がリーダーとなり、1年生の多くが実働する。11月になると1年生だけで運営できるようにする。

「探究基礎」の授業を中心とした探究活動と、これら生徒の主体的な活動が、堀川高校の「文化」をつくってきた。自ら考えて動く、わからなければ質問する、聞かれたら教える、学んだことは共有する…もちろん、入学したての生徒には難しいが、教員や上級生が導くことはできる。「答えを先に出さず、君たちに今必要なものとは？と問います。生徒を路頭に迷わせる。すると徐々に集まって話し合いが始まります。やはり意識的に導いていかないと、自立する18歳は育ちませんから」と、統括室室長の橋詰忍先生は言う。こうした環境の中で新入生は大人になることを学んでいく。

企画研究部長の飯澤功先生も続ける。「新しく赴任してくる教員も同じです。委員会活動などを見ているうちに、ここは言いすぎずにはうっておくのがいいといった塩梅がわかってくる。すでに堀川で学んだ感性をもっている2年生や3年生の生徒に助けられているのです」。

進路指導部はなく 進路指導は学年団が率先

ところで、同校には進路指導部がない。進路指導のすべては学年が行う。例えば、生徒に学部学科の話聞かせたという企画が学年団にもち上がるとする。すると、「○○学部に進学した卒業生が○人ほしい」など、以前の学年主任に依頼する。そしてやはり、生徒が運営にかかわる。また、堀川は生徒にとって選択の機会に恵まれた学校だ。文理選択や科目選択などはもちろん、どんな委員会活動に参加するか、あるいはいかかといった選択肢がある。「探究基礎」のゼミ選択や課題設定も、生徒にとっては非常に大きな選択だ。「本校の基本的な考え方として、実践させることが力をつける近道というものがあります」と飯澤先生。生徒はあらゆる選択を繰り返す中で、進路選択に対する力もつけていく。「ですから、絶対に自分で選ばせません。特に課題設定の際は、カウンセリングのよう

School Data

1908年創立／普通科・人間探究科・自然探究科／生徒数747人（男子420人・女子327人）／進路状況（2013年度実績）大学61.3%、専各2.8%、就職00.0%、その他35.9%



統括室室長 橋詰 忍先生
企画研究部長 飯澤 功先生

そんな堀川高校でも、教科の授業の形態は必ずしも探究的なものではない。

探究活動で身についた 学び合いの精神

も担当者が面談することも。その生徒が何に興味をもって生きているのかを深く探り、最終的に自分で決めさせるのです」。

ほかの生徒からの刺激を与えて考えさせるということも、堀川でよく使われる手法。「海外研修で有意義な活動を行った生徒や、コンテストなどに選ばれた生徒には、いろいろな場での体験談や学んだことを話してもらいます」と橋詰先生。学びの還元が絶えず行われ、学びや進路に対してどんな空気が醸成されていく。

なく、一部の先生をのぞき一斉教授型が主流だった。しかし、授業の基本設計が探究型であるIBの研究や、アクティブラーニングの校内研修を行ったことをきっかけに、今、教科においてもアクティブで探究的な授業を目指し始めている。そもそも生徒は探究活動や委員会、部活動などで学び合いをすることは慣れていて、堀川独自の学校文化は、授業も含めた校内の隅々まで行き渡ろうとしている。

また、SGHの取り組みでは多様性に富んだ社会の中で自立して生きる「しなやかさ」「したたかさ」を備えた青年の育成を目指すと言った。しなやかさとは、どのような環境や条件のもとでも目標を成し遂げる柔軟性、したたかさとは、知的に耐え交渉を続けることにより、多様な価値観を重ね合わせて新たに創造する力を想定したという。

「生徒は祇園祭の手伝いをしていますが、より自立するために、これからはそういった学校外での活動を増やしてほしい。京都の観光の問題に対してアクションを起こすのもいいでしょう」と飯澤先生。生徒たちの活動が自主的に社会とつながりを持ち始めるのは、そう遠くなくさそうだ。

図2 3つの柱と生徒による主体的活動

